The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	インターネットでアクセスできるリソースを利用した教室外の日本語学習の理論構築
Author(s)	欧, 麗賢
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61404
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　欧　麗賢　　）	
論文題名	インターネットでアクセスできるリソースを利用した 教室外の日本語学習の理論構築

論文内容の要旨

本論文の第1章では、筆者は大学時代から始めた自分自身の日本語学習の経験や周囲の人々の日本語学習の経験から、インターネット上のリソースを利用した教室外の日本語学習に関心を持つようになった経緯を述べる。インターネット上のリソースを利用して教室外で日本語学習を行うことには、コンピュータやインターネット、モバイルデバイスなどの情報通信技術の発達と普及がある。特に、21世紀に入ってからの15年間で、ウェブ2.0やモバイルデバイス、携帯通信技術がさらに発達し普及したことによって、言語学習者がリソースに容易にアクセスできるようになり、言語学習の可能性が時間や空間の制約を超え、教室外へと拡大していった。こういった社会変化の下、言語教師や言語教育研究者の目の届かない教室外の場における言語学習は、ますます関心を集めるようになった。

第2章では、コンピュータやインターネット、モバイルデバイスなどのICTの発達と普及の歴史を整理し、言語教育・言語学習におけるテクノロジーの利用の歴史および言語学習者の変化を示す。そして、第3章の3.1では、本研究の出発点である「教室外学習」（out-of-class learning）という用語の定義を明確にし、「自然な環境での自己主導型学習」（self-directed naturalistic learning）に焦点を当てる理由を述べる。3.2では、国境を越えた移動による学習機会の利用と、ラジオやテレビを通した学習から、1990年代から2000年代の初頭までの教室外学習の実態を示した上で、21世紀の半ば頃に盛んに行われるようになったテクノロジーを利用した教室外の言語学習の実態を詳述する。そこから、教室外学習が行われる文脈を考慮し、学習過程での成功とは言えない学習者の経験を含め、学習過程を動的に説明できる理論を生成する必要があることを結論付ける。また、教室外学習の多くが言語教師や言語教育研究者の目の届かない場で学習者がプライベートの時間に行う活動であるため、教室外学習の質は学習者が自身の学習をコントロールする能力である学習者オートノミーを発揮できるかどうかによって、異なってくる。それゆえ、3.3では、学習者オートノミーの研究と実践について整理する。その結果から、学習者オートノミーの研究と実践では、次の3つの現状が存在していることが分かる。まず、学習者オートノミーの研究と実践は言語教室やセルフ・アクセス・センター（SAC）、CALLなどの教育機関の文脈で行われることが圧倒的に多いということである。次に、学習者の認知的側面に注目する一方で、学習者を取り巻く社会文化的文脈や学習過程に伴う感情的要因をあまり重要視していないということである。さらに、これらの認知的側面、社会的側面、感情的側面を統合し、学習者オートノミーを検討する研究がまだ数少ないため、さらに議論を深める必要があるということである。

第4章ではここまで概観してきた教室外の言語学習および学習者オートノミーの研究と実践の課題を踏まえ、本研究の位置づけを示し、リサーチクエスチョンを設定する。本研究では、インターネット上のリソースを利用した教室外の日本語学習に焦点を当て、中国のA大学の日本語学科の大学生を対象とし、彼らが①どのようにインターネット上のリソースを利用するようになったのか、②どのような要因により、インターネット上のリソースを継続的に利用できたのか、③どのようなプロセスを経て、インターネット上のリソースの利用をやめたのか、という3つのリサーチクエ

スチョンを設けた。

第5章では、分析過程でデータが持つ文脈を重視し、学習過程を動的に説明できる理論を構築するための研究方法であるグラウンデット・セオリー・アプローチ（M-GTA）を採用する妥当性を述べる。

第6章では、中国の日本語学科の大学生を対象に行ったインタビューのデータに基づき、M-GTAによるデータ分析の結果を提示する。分析によって、教室外の日本語学習では学習者は学習方法とリソースの情報の入手をはじめ、学習方法とリソースの選択、リソースの利用という3つのプロセスにわたり、学習をコントロールする能力を要求されていることが明らかになった。学習方法とリソースの情報を入手するプロセスは、【大学入学前の日本のポップカルチャーとの接触経験】、【日本語環境に対する認識】、【学習方法とリソースの情報の入手】の3つのカテゴリーによって構成されている。そして、学習方法とリソースを選択するプロセスは、【リソースの使いやすさによる選択】、【自分の好みに合わせた選択】、【自分の日本語のレベルに合わせた選択】、【自分の日本語学習の目的に合わせた選択】の4つのカテゴリーから生成されている。最後に、リソースを利用するプロセスの理論は、【状況の変化に合わせた利用方法の調整】、【学習目的、日本語能力の変化に合わせた学習方法とリソースの変化】の2つのカテゴリーによって構成されている。以上に挙げた学習過程の3つのプロセスの行動をコントロールし、教室外学習を行い続けた学習者がいるのに対し、学習をうまくコントロールできずに、リソースの利用をやめてしまった学習者がいることも分かった。

第7章では、第6章のデータ分析の結果を踏まえ、分析結果を構成する概念やカテゴリーの関連性を示す概念結果図を作成し、それに基づいてストーリーラインを書く。

第8章では、第7章のストーリーラインを踏まえ、学習者オートノミーの理論から、インターネット上のリソースを利用した教室外の日本語学習に存在するメカニズムについて考察する。考察では、インターネット上のリソースを利用した教室外の日本語学習では、学習方法とリソースの情報の入手、学習方法とリソースの選択、リソースの利用の3つのプロセスが存在しており、この3つのプロセスは独立しているのではなく、関連しあっていることが分かった。そして、リソースを継続的に利用できる学習者は、これらの3つのプロセスに関わる各ステップをコントロールしていく能力を持っている学習者である。また、学習をコントロールする過程は、学習者の過去の経験、学習者と接触した人々や日本語授業での関わりという社会的要因から影響を受けるとともに、学習者の個人の好みや関心、娯楽などの要因からも影響を受けている。従って、学習者オートノミーを検討する際、学習者の行動だけでなく、その行動に影響を与える、学習者の過去の経験や、学習者と関わっている人々を含めた様々な社会的要因、学習者個人の好みや関心、娯楽などの言語学習以外の要因も考慮すべきだという結論に至った。

このように、本研究では、中国の日本語専攻の大学生を対象としたインタビューのデータをもとにし、M-GTAという分析方法によって、インターネット上のリソースを利用した教室外の日本語学習の理論を構築した。本研究で得られた理論は、中国の日本語教育の現場で学習者の教室外学習を手助けしたい教師がサポートをする上での示唆を与えるものであると考えられる。一方、本研究で構築した理論は、調査協力者のおかれた文脈に依存しており、応用の範囲が限られているという課題がある。この問題を解決するためには、将来的に、本研究で構築したインターネット上のリソースを利用した教室外の日本語学習の理論をもとにし、研究対象を非日本語専攻の大学生へ、研究フィールドを中国の他大学まで広げ、より広い現象を説明できる理論を構築していく必要があるだろう。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　欧　麗賢　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	青木直子
	副 査	大阪大学　教授	石井正彦
	副 査	大阪大学　教授	マシュー・バーデルスキー

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　インターネットでアクセスできるリソースを利用した教室外の日本語学習の理論構築

学位申請者　欧　麗賢

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　青木直子

副査　大阪大学教授　　石井正彦

副査　大阪大学教授

マシュー・バーデルスキー

【論文内容の要旨】

本論文は、中国の大学で日本語を専攻する大学生が、インターネットでアクセスできるリソースを利用して授業外に日本語を学習しはじめるまでの過程、学習を継続させられる要因、あるいは途中で諦めてしまうに至る経緯について、修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて理論的モデルを構築しようとしたものである。本論文はＡ４判、226 ページ、400 字詰めの原稿用紙では約 750 枚にあたる分量で、９章と参考文献、３つの付録からなっている。第 1 章では、筆者の大学時代の日本語学習経験や博士前期課程での研究の経験を述べ、本研究を着想するに至った経緯をたどる。第 2 章では、研究の背景として、コンピュータやインターネット、モバイルデバイスなどの ICT の発達と普及の歴史を整理し、言語教育・言語学習におけるテクノロジーの利用の歴史および言語学習者の変化を示す。第 3 章では、本研究の理論的背景である学習者オートノミーと教室外学習についての先行研究のレビューを行い、第４章で、中国沿岸部の大学の日本語学科の学生が①どのようにインターネット上のリソースを利用するようになったのか、②どのような要因により、インターネット上のリソースを継続的に利用できたのか、③どのようなプロセスを経て、インターネット上のリソースの利用をやめたのか、という本研究のリサーチ・クエッチョンを導きだしている。第 5 章では、本研究で使用する修正グラウンデット・セオリー・アプローチ（M-GTA）について類似の方法論との比較検討を行い、なぜこの研究にふさわしいかを述べた上で、研究の手順を紹介している。第６章では、収集したインタビューのデータを、M-GTA によって分析した結果として得られた 38 の概念とその具体例が示される。これらは、学習方法とリソースの情報の入手、学習方法とリソースの選択、リソースの利用という 3 つの分析テーマに着目することによって得られたものである。それらの概念は９つのカテゴリー（【大学入学前の日本のポップカルチャーとの接触経験】、【日本語環境に対する認識】、【学習方法とリソースの情報の入手】、【リソースの使いやすさによる選択】、【自分の好みに合わせた選択】、【自分の日本語のレベルに合わせた選択】、【自分の日本語学習の目的に合わせた選択】、【状況の変化に合わせた利用

方法の調整】、【学習目的、日本語能力の変化に合わせた学習方法とリソースの変化】）にまとめられる。第７章では、第 6 章のデータ分析の結果を踏まえ、分析結果を構成する概念やカテゴリーの関連性を示す概念結果図と、それに基づいて書かれたストーリーラインが示される。第 8 章では、第 7 章のストーリーラインを踏まえ、学習者オートノミーの理論から、インターネット上のリソースを利用した教室外の日本語学習に存在するメカニズムについて考察している。その結果、学習方法とリソースの情報の入手、学習方法とリソースの選択、リソースの利用の 3 つのプロセスは独立しているのではなく、関連しあっていること、リソースを継続的に利用できる学習者は、これらの 3 つのプロセスに関わるステップをコントロールする能力を持っていること、また、学習をコントロールする過程は、学習者の過去の経験、学習者と接触した人々や日本語の授業での経験という社会的要因から影響を受けるとともに、学習者の個人の好みや関心、娯楽などの要因からも影響を受けていることがわかったとしている。第９章は結論で、本研究のまとめと今後の課題が述べられている。

【論文審査の結果の要旨】

本研究は、インターネットを利用した日本語学習という、極めて最近可能になった学習方法をとりあげ、教師の目が届かない授業外の学習がどのように行われているかを明らかにしようとしたという点で、意義のある研究である。中国の大学に在籍する 16 名の学生に、対面式のインタビュー、スカイプによるインタビュー、チャットによる補足的インタビューを複数回行い、学部４年間の日本語学習の歴史について詳細なデータを収集したという点でも優れていると言える。分析結果は、大学入学前の経験や周囲の人々、また学部４年間の日本語能力や学習者の生活状況の変化が、どのようにインターネットを利用した日本語学習へのアプローチに影響を与えるかを説明できるものであり、これまでの研究に類をみない価値のあるものである。英語の文献も大量に読破し、先行研究のレビューで言及している点も評価できる。しかし、この論文には以下のような問題もある。まず、第二言語習得研究全体の研究史に関する理解に不十分なところがある。また、本研究の重要なキー概念である学習者オートノミーに関しても、最新の研究がフォローできておらず、本研究の新たな知見について、正確な評価ができていない。分析手順の説明についても用語の選択が不適切な部分がある。さらに、分析結果の詳細を報告する第６章、それを最終的にまとめた第７章の結果図、付録として提示されている概念生成の過程を表す表などに、不正確な箇所が見られる。このような問題はあるものの、本論文は博士論文としての要件を備えていると言える。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。